

正倉院事務所における古文書調査のあゆみ

History of the Ancient-Documents Investigation in the Office of the Shoso-in Treasure House
SASADA Yu

佐々田 悠

1 はじめに—調査のあゆみ

校倉造りで知られる正倉院宝庫（正倉院正倉）は奈良・春日山の麓に位置する。宮内庁正倉院事務所はその正倉院宝庫や聖語蔵、またそこに伝来した宝物・経巻を保存管理するための機関であり、業務の一環として正倉院古文書の調査を行ってきた。その内容についてはすでに、杉本一樹「正倉院文書の原本調査」⁽¹⁾に紹介されているところである。したがって屋上屋を架すことになるが、ここでは近年の特別調査や国立歴史民俗博物館のコロタイプ複製事業との関わりも含めて、正倉院事務所における古文書調査の全体像を紹介したい。

「調査のあゆみ」と題したように、本稿では調査の経緯や環境の変化に注意しながら、なるべく年代順に流れを追うことを目的とする。史料を所蔵する機関として公開と保存の両立を図ることは当然であるが、その時々事情や技術的な問題から、公開は漸次的にならざるを得ない。遺憾ながらそのことが研究史に影響を与える可能性がある以上、調査の流れや現状を出来るだけ広く知っていただきたいと思うからである。言わば事務所としての「自分語り」に終始することをお許しいただきたい。



写真1 正倉院正倉の外観 中央の中倉に正倉院古文書が収められていた

さて、正倉院古文書を含む正倉院宝物は、現在空調を備えた西宝庫において勅封によって管理されており、毎秋およそ2か月間、開封して総点検を行うほかは基本的に見ることはできない。これは明治時代からの管理体制を継承したものである。一見すると文化財の「死蔵」のようにも思われるが、人間の関わりをコントロールしつつ、点検を積み重ねることで、文化財の適切な保存が図られている。我々は文化財の「今」だけではなく「未来」に対して責任がある。

そのため宝物の調査には制約があるが、その時々に応じた調査体制が生まれ、アプローチがなされてきた。戦後の宝物調査の流れは、大まかにいって(1)外部団体による調査の段階、(2)正倉院の企画・立案による特別調査を中心とする段階、そして(3)正倉院自身の経常調査(通常の業務における調査)が進展し、さらに機器や人員の充実した段階へ、とまとめられると思う。古文書の調査についても同様である。以下、順に見ていきたい。

2 戦後の外部調査

(1) 外部専門家による調査

戦前から続く調査の流れの1つに、外部専門家による調査がある。大正9年(1920)帝室博物館総長の森林太郎(鷗外)が楽部に委嘱して行った楽器調査のような事例もあるが、基本的には外部団体からの要望を踏まえて、調査の便宜が図られた。

東京帝国大学史料編纂掛(のち東京大学史料編纂所)による正倉院古文書の調査はその代表的なものである。明治33年(1900)以来、『大日本古文書』刊行を目的として原本の調査・撮影が許可され、途中謄写本を作成しながら編年文書全25巻が刊行された(1901~1940年)。これにより正倉院古文書の大部分の積文が提示された。その後も東南院古文書・東大寺開田地図の翻刻、『日本荘園絵図聚影』による図版・積文の提示、『正倉院文書目録』による接続復元の提示へと続き、現在に至っている。これらの事業は積文や写真、目録など学界の共有財産を作り、情報公開を担うものであるが、それらをよくなし得る人材と組織は当時の帝室博物館や正倉院事務所に充分備わっておらず、要望を契機として適切な外部機関に委ねられたのである。

これとはやや異なるが近いものに、戸籍計帳調査がある。戦後興隆した籍帳研究において、原本の調査が不可欠であることは学界の共通認識であった。そこで竹内理三氏を代表者とする戸籍計帳研究会は、科学研究費による総合研究「日唐羅戸籍計帳の基礎的研究」を組織し、原本調査を願い出た。それを受けて昭和33~35年(1958~1960)の曝涼中に調査する機会が設けられたのである。その成果の一部は『史学雑誌』誌上に概報として公表された。ただし、目的の1つであった新たなテキストの作成には至っていない。

こうした大学や科研費による外部の調査は、戦後様々な分野の関心を呼び、正倉院でも一部を受け入れた経緯がある。しかし、限られた開封期間と正倉院の人員では要望に対応しきれず、また保存管理の上からも限界があり、次第にできなくなった。戸籍計帳調査はこの時期特有の事例の1つであり、以後の外部調査は正倉院主体の特別調査が担うこととなる。

なお、戸籍計帳調査の前史として、岸俊男氏の調査に触れておく必要があるだろう。籍帳研究を牽引する岸氏が所謂陸奥国戸籍に取り組みされていた折、和田軍一所長らの計らいで昭和31・32年(1956・1957)の曝涼中に正集第26巻を調査する機会が設けられたのである。その成果はいちはや



写真2 西宝庫内の古文書収納状況

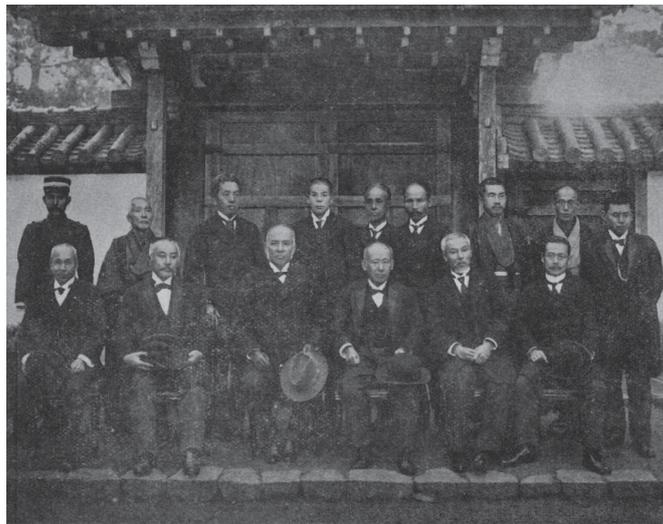


写真3 御物整理掛と古文書調査員の面々

前列中央に杉孫七郎，股野琢，右端に三上参次，後列の右端に黑板勝美が並ぶ
明治37年末ごろとみられる（東洋美術特輯『正倉院の研究』飛鳥園，1929年より）

く『書陵部紀要』に公表された⁽⁴⁾。岸氏の調査は，原本調査がもたらす成果を内外に知らしめるもので，氏自身が著書のなかで述べているように上記研究会の原本調査へと繋がるものであった⁽⁵⁾。いわばトレンチ的役割を担ったわけである。外部団体の調査事例はその後途絶えたが，こうした個別的な外部調査の方式—正倉院の立案により専門家個人に調査してもらい，その成果を紀要等で公表していただく—は，現在に継承されている。

(2) 特別調査の開始

戦後正倉院事務所が設けられると，新たな調査方式として特別調査という枠組みが作られた。特別調査は第一級の専門学者，実技者，自然科学者による権威ある科学的総合調査を行い，報告書を作成するというもので，おおよそ2・3年（すなわち2・3回の開封）を単位として宝物の調査を実

施するのである。正倉院宝物の工芸的、技術的、材質の特徴を明らかにするために、実技者や自然科学者も加えて、多面的かつ学際的な学術調査が目指されている。戦後いちやくこうした枠組みが作られたことは注目に値する。

特別調査は正倉院の企画・立案によることも大きな特徴である。正倉院宝物に対する諸学界の要望にすべて応えることは宝物の保存管理の上からも不可能であるが、限られた職員による調査にも当然限界がある。その欠を補うべく、正倉院がテーマを企画し、第一線の専門家数人の眼で見てもらうのである。自前の企画であるので、正倉院側である程度事前の準備が可能であり、特定分野に集中しないように順次計画できるというメリットもある。また、調査の場で示される専門家のものの見方は、同席する職員にとって他に代え難い勉強になる。

特別調査の嚆矢となったのは昭和23年(1948)の薬物調査と楽器調査で、以来表1のごとく行われている。その成果は、昭和20年代は主に『書陵部紀要』に公表された。昭和30～40年代にな

表1 特別調査一覧(補足調査については略す)

調査項目	調査期間	報告書
薬物(第1次)	昭和23～26年(1948～1951)	『正倉院薬物』(植物文献刊行会, 1955年)
楽器	昭和23～27年(1948～1952)	『正倉院の楽器』(日本経済新聞社, 1967年)
建築	昭和24・30年(1949・1955)	『書陵部紀要』第7号, 1956年
金工(第1次)	昭和25～27年(1950～1952)	『書陵部紀要』第5号, 1955年
密陀絵	昭和25～28年(1950～1953)	『書陵部紀要』第4号, 1954年
漆工(第1次)	昭和28～30年(1953～1955)	『書陵部紀要』第9・11号, 1958・1959年
材質	昭和28～30年(1953～1955)	『書陵部紀要』第8号, 1957年
古裂(第1次)	昭和28～37年(1953～1962)	『書陵部紀要』第7～13号, 1956～1962年
絵画	昭和31～33年(1956～1958)	『正倉院の絵画』(日本経済新聞社, 1968年)
書蹟	昭和31～34年(1956～1959)	『正倉院の書蹟』(日本経済新聞社, 1964年)
ガラス	昭和34～36年(1959～1961)	『正倉院のガラス』(日本経済新聞社, 1965年)
紙(第1次)	昭和35～37年(1960～1962)	『正倉院の紙』(日本経済新聞社, 1970年)
陶器	昭和37～39年(1962～1964)	『正倉院の陶器』(日本経済新聞社, 1971年)
羅	昭和37～43年(1962～1968)	『正倉院の羅』(日本経済新聞社, 1971年)
大刀外装	昭和38～40年(1963～1965)	『正倉院の大刀外装』(小学館, 1977年)
古裂(第2次)	昭和38～47年(1963～1972)	『書陵部紀要』第11・14・19・26号, 1959・1962・1967・1974年
伎楽面	昭和40～42年(1965～1967)	『正倉院の伎楽面』(平凡社, 1972年)
刀身	昭和41～43年(1966～1968)	『正倉院の刀剣』(日本経済新聞社, 1974年)
組紐	昭和43～45年(1968～1970)	『正倉院の組紐』(平凡社, 1973年)
漆工(第2次)	昭和43～45年(1968～1970)	『正倉院の漆工』(平凡社, 1975年)
金工(第2次)	昭和45～47年(1970～1972)	『正倉院の金工』(日本経済新聞社, 1976年)
木工	昭和47～49年(1972～1974)	『正倉院の木工』(日本経済新聞社, 1978年)
木材	昭和51～53年(1976～1978)	『正倉院年報』第3号, 1981年
竹	昭和54～56年(1979～1981)	『正倉院年報』第6号, 1984年
植物	昭和57～58年(1982～1983)	『正倉院年報』第9号, 1987年
石製宝物	昭和59～60年(1984～1985)	『正倉院年報』第10号, 1988年
瑠璃	昭和61～62年(1986～1987)	『正倉院年報』第13号, 1991年
真珠	昭和63～平成1年(1988～1989)	『正倉院年報』第14号, 1992年
繊維	平成2～3年(1990～1991)	『正倉院年報』第16号, 1994年
螺鈿	平成4～5年(1992～1993)	『正倉院年報』第18号, 1996年
薬物(第2次)	平成6～7年(1994～1995)	『図説 正倉院薬物』(中央公論新社, 2000年)
鳥	平成8～9年(1996～1997)	『正倉院紀要』第22号, 2000年
年輪年代	平成10～11年(1998～1999)	『正倉院紀要』第23号, 2001年
刺繍	平成12～13年(2000～2001)	『正倉院紀要』第25号, 2003年
皮革	平成14～16年(2002～2004)	『正倉院紀要』第28号, 2006年
紙(第2次)	平成17～20年(2005～2008)	『正倉院紀要』第32号, 2010年
毛	平成21～24年(2009～2012)	『正倉院紀要』予定
麻	平成25年～(2013～)	『正倉院紀要』予定

ると、大型美術本の体裁で出版するケースが目立つ。これは調査所見とともに詳細な写真の提示を重視したためであり、その写真が現段階でも最も宝物の詳細が分かる写真であることが少なくない。昭和50年代からは、『書陵部紀要』から正倉院の事業報告が独立して『正倉院年報（紀要）』となったのを契機にそちらに掲載されるようになり、現在に至っている。

古文書そのものに関わる特別調査としては、昭和30年代に「書蹟」と「紙（第1次）」の2つが行われた。いずれもビジュアルの提示に大きな特徴がある。それぞれの調査と成果の概要は以下の通り。

① 特別調査「書蹟」

調査員：神田喜一郎・内藤乾吉・田山信郎・堀江知彦

目的：書道史的観点からの研究

期間：昭和31～34年（1956～1959）

報告書：『正倉院の書蹟』日本経済新聞社、昭和39年（1964）

図版：原色図版11点、単色図版173点、別に単色挿図103点

* 図版は原寸を基本とする（幾分縮写したものが3割弱）。後述する毎日新聞社10冊本所収の書巻類を除けば、今なお依拠すべき原寸図版である。新羅国官文書も含む。

論考：正倉院の書蹟の概観（神田喜一郎） 書巻や献物帳の書の違い、書法の変遷を論じる。

正倉院古文書の書道史的研究（内藤乾吉） 中国の書の影響を論じ、筆者の識別に及ぶ。

正倉院文書管見（田山信郎） 正倉院様として捉え、各書に個別的な解説を施す。

正倉院書蹟に見る和様の展開（堀江知彦） 小野道風に至る流れを論じる。

* 別に正倉院事務所による解説、図版解説あり。

② 特別調査「紙（第1次）」

調査員：寿岳文章・大沢忍・上村六郎・町田誠之・安部栄四郎

目的：紙の総合的調査（材料・組成、抄紙・染紙の技法）

期間：昭和35～37年（1960～1962）

報告書：『正倉院の紙』日本経済新聞社、昭和45年（1970）

図版：原色図版18点、単色図版91点、顕微鏡写真185点（6点は原色でも提示）、標本紙

* 透過光写真や顕微鏡写真を多用し、繊維の状態や地合いを見せる。また調査員の安部栄四郎氏らによる標本紙を付して質感や風合いの共有をはかるなど、従来にないアプローチがはかられている。

論考：正倉院の紙の文化史的所見（寿岳文章） 年代順に各文書の紙質を解説する総論。

正倉院の紙の研究（大沢忍） 繊維表面の分類を提示、用途・場の違いを論じる。

正倉院宝物の染紙について（上村六郎） 染紙の種類・技法について論じる。

上代の紙の化学的考察（町田誠之） 雁皮の特質について化学的に論じる。

成果：溜漉から流漉へという流れや、ネリの有無、雁皮の歴史的位置づけなど重要な論点を提示。

(参考) 特別調査「金工(第2次)」

調査員: 三井安蘇夫・鈴木貫爾・蔵田蔵・内藤四郎・中野雅樹
期 間: 昭和45~47年(1965~1967), 昭和49年(1969) 補足
報告書: 『正倉院の金工』日本経済新聞社, 昭和51年(1976)
図 版: 原色図版28点, 単色図版358点, 銘文図版65点

* 金工に施された銘文の図版を豊富に含む。佐波理加盤付属文書の表裏写真, 反古紙に巻かれた佐波理匙の写真もあり。

論 考: 正倉院金工の銘文(柳雄太郎)ほか 金工33件について銘文を提示, 解説を施す。

なお, これら特別調査①②の成果を踏まえ, 長らく正倉院事務所保存課長を務めた松嶋順正氏によって「日本の美術」シリーズに『正倉院の書跡』『飛鳥・奈良時代の書』が出された。また, 各種の特別調査を支えた関根真隆氏により, 古文書の語彙を中心に奈良朝の食生活や服飾について網羅的に解明した書籍が刊行されたことも特筆される(後掲, 表3)。

3 経常調査とその周辺

(1) 経常調査の開始

正倉院事務所の仕事は, 修理, 調査, 模造の3つが柱である。このうち調査は, 上記の特別調査が主たる部分を占めたが, 一方で少人数ながら職員が行う経常調査も行われてきた。その端緒は大正13年(1924)の調査書作成に遡る。昭和に入ると石田茂作・松嶋順正の両氏がこれにあたり, 基礎的な調査が備えられた。昭和40年ごろまでに一巡すると, 以後は残材調査やより踏み込んだ二巡目の調査が進められている。

古文書の経常調査は, この段階でようやく日程にのぼったようで, 柳雄太郎技官を主担当として昭和50年(1975)に始められた。

中倉に収蔵されている古文書は, いわゆる正倉院文書と東南院文書を合わせた七七九卷五冊を数えるが, これら古文書の台帳を作成するため, 「正倉院古文書目録」(昭和四年奈良帝室博物館正倉院掛発行)の順序に従い, 毎秋若干ずつ出蔵して調査を行なうこととなった。[『正倉院年報』『書陵部紀要』第28号, 1977年]

これ以前は, 宮内省宝器主管による『正倉院古文書目録』(明治41年10月引継, のち昭和4年に奈良博が印刷)があったが, 求められる情報はそれでは充分でなく, 古文書の調査をとって将来の台帳作成が目指されたことが知られる。この時期に始まったのは, 直接的には古文書を担当する職員の陣容が整ったという事情もあるだろう。

調査内容の一部は年報において公表された。当初は『大日本古文書』未収の紹介や釈文訂正が主であったが, 次第に形状や痕跡, 紙質といった「原本だからこそその情報」に注意が向けられ, 接続の復元に及ぶようになっていく。これには『正倉院年報(紀要)』の独立と「年次報告」の充実化という流れも影響している。各年の調査対象をまとめると表2のようになる。なお, 経常調査が開始されて以後, 古文書関係の特別調査はしばらく行われていない。調査の中心は特別調査から経常調査へとシフトしたと言ってもいいかもしれない。

表2 古文書の経常調査

調査年度	調査対象	閲読・分析情報	巻数	担当	所収	その他
◎ 戦後 特別調査の開始 (表3 特別調査①～② 参照)						
昭和 50 (1975)	正集 1～10		10 巻	柳	書陵 28	
昭和 51 (1976)	正集 11～20		10 巻	柳	書陵 29	
昭和 52 (1977)	正集 21～30	正集 20	10 巻	柳	年報 1	
昭和 53 (1978)	正集 31～40	正集 16, 27, 別集 28	10 巻	熊谷	年報 2	
昭和 54 (1979)	正集 41～45 続修 1～5	続修 42, 43, 続々 28-7, 35-6, 46-6	10 巻	熊谷	年報 3	
昭和 55 (1980)	続修 6～15	正集 12, 続々 38-1	10 巻	熊谷	年報 4	
昭和 56 (1981)	続修 16～35	正集 5, 続修 40, 41, 43, 続々 42-5	20 巻	熊谷	年報 5	
昭和 57 (1982)	続修 36～45	続々 23-4, 44-10, 45-1	10 巻	杉本	年報 6	X 線回折装置の導入 岸「四至図」, 熊谷「帳外品」
昭和 58 (1983)	続修 46～50 後集 1～5	続々 11-5・6, 44-6	10 巻	杉本	年報 7	蛍光 X 線分析装置の導入 点本調査, 杉本「経巻銘」(1)
昭和 59 (1984)	後集 6～25	続修 21, 続々 40-2	20 巻	杉本	年報 8	
昭和 60 (1985)	後集 26～43 別集 1～2	後集 8, 19, 別集 8, 33, 48, 続々 10-8, 18-4, 24-6, 42-5, 45-5・7, 日名子 X 線(正集 29, 31～34, 36, 37, 40, 42～44, 後集 30, 34)	20 巻	杉本	年報 9	資料紹介 (124 号櫃文書)
昭和 61 (1986)	別集 3～22	続修 20, 31, 45, 後集 42, 別集 48, 続々 4-21, 18-4・6, 23-5, 29-7, 36-1, 41-7, 42-2・3・5, 43-16, 45-2, 日名子 X 線(続修 7, 8, 別集 3, 4, 7, 9, 11, 15, 16, 塵芥 7, 続々 19-8)	20 巻	杉本	年報 10	
昭和 62 (1987)	別集 23～42	続修 28, 続々 38-3・4, 39-4	20 巻	杉本	年報 11	
昭和 63 (1988)	別集 43～50 塵芥 1～2	報告は次号にまとめる	10 巻	杉本	年報 12	赤外線カメラの導入 杉本「鳥毛立女裏面」
平成 1 (1989)	塵芥 3～22	塵芥 37 X 線(塵芥 12, 14, 20)	20 巻	杉本	年報 13	杉本「端継・式敷・裏紙」
平成 2 (1990)	塵芥 24, 25, 28, 30, 35	塵芥 10, 21	5 巻	杉本	年報 14	
平成 3 (1991)	塵芥 23, 29, 31, 34, 36	塵芥 2, 3, 5, 16～18, 続々 47-4	5 巻	杉本	年報 15	
平成 4 (1992)	塵芥 26, 32	続修 2, 32, 塵芥 1, 往来 2 号	2 巻	杉本	年報 16	
平成 5 (1993)	—	—	—	—	年報 17	
平成 6 (1994)	塵芥 27, 33, 38, 39, 雑張 1～3, 蠟燭文書	塵芥全体	4 巻 3 冊	杉本	年報 18	
平成 7 (1995)	—	—	—	—	年報 19	杉本「経巻銘」(2)
平成 8 (1996)	—	—	—	—	紀要 20	短報(日向国計帳ほか)
平成 9 (1997)	—	—	—	—	紀要 21	尾形「調繩」
平成 10 (1998)	—	—	—	—	紀要 22	
平成 11 (1999)	—	—	—	—	紀要 23	飯田「未修目録」(1)
平成 12 (2000)	—	—	—	—	紀要 24	X 線分析装置の更新 赤外線カメラの更新 飯田「未修目録」(2)
平成 13 (2001)	—	X 線(献物帳, 続々 46-4)	—	—	紀要 25	飯田「未修目録」(3)
平成 14 (2002)	—	—	—	—	紀要 26	飯田「玻璃装文書断片」
平成 15 (2003)	続々修 1-1～2-4	正集 8, 続修 14, 続々 23-4, 拾遺 25, 26, 34, 36, 37, 61 X 線(続々 35-3, 東南 1-7, 5-3)	10 巻	飯田	紀要 27	蛍光分光光度計の導入 短報(景雲経軸端の顔料)
平成 16 (2004)	—	X 線(塵芥 1～20)	—	—	紀要 28	山本「華嚴経(新羅)」
平成 17 (2005)	続々修 2-5～3-3	続修 20, 22, 後集 13, 続々 3-4, 5-3, 8-6, 12-2, 12-6・7, 18-7, 43-20・22, 45-3 X 線(塵芥 21～39, 大嶋郡印)	10 巻	飯田	紀要 29	飯田「新発見の文書断片」 杉本「四分律」
平成 18 (2006)	—	—	—	—	紀要 30	飯田「大嶋郡」, 北「献物帳」
平成 19 (2007)	◎ 特別調査 紙(第 2 次) (表 3 特別調査③ 参照)	—	—	—	紀要 31	
平成 20 (2008)	—	—	—	—	紀要 32	椰子実
平成 21 (2009)	—	—	—	—	紀要 33	雑材(倉札)
平成 22 (2010)	—	—	—	—	紀要 34	開田地図(糞置), 葉袋, 飯田「景雲経」
平成 23 (2011)	—	—	—	—	紀要 35	雑札第 1 号, 葉袋, 米田「屏風」
平成 24 (2012)	—	—	—	—	紀要 36	吹絵紙, 脚端飾裏打, 葉袋

影印集成(八木書店)ほか			
冊	対象	刊行	担当
1	正集 表 1～21	1988.5	関根・杉本
3	正集 裏 1～21	1989.1	関根・杉本
2	正集 表 22～45	1990.1	関根・杉本
4	正集 裏 22～45	1990.9	関根・杉本
5	続修 表 1～25	1991.4	関根・杉本
7	続修 裏 1～25	1992.2	関根・杉本
6	続修 表 26～50	1993.6	関根・杉本
8	続修 裏 26～50	1994.3	関根・杉本
◎ 荘園絵図聚影刊行(1995～2002)			
9	後集 表 1～22	1995.8	米田・杉本
10	後集 表 23～43	1996.8	米田・杉本
11	後集 裏 1～43	1997.8	櫻山・杉本
12	別集 表 1～22	1999.8	櫻山・杉本
13	別集 表 23～50	2000.12	杉本・飯田
14	別集 裏 1～50	2001.8	杉本・飯田
15	塵芥 表 1～20	2004.12	杉本・飯田
16	塵芥 表 21～39	2006.3	杉本・飯田
17	塵芥 裏 1～39 他	2007.8	杉本・飯田
◎ 荘園絵図聚影 釈文編古代(2007)			
◎ 東南院古文書撮影(2008～2010)			
18	塵芥 復元偏	未定	

※本表は調査年度を主として整理しているため、「所収」欄の年報・紀要の発行年は主に翌々年 3 月となる。
※「その他」の欄には、各種機器の導入トビックスのほか、年報・紀要所収の関係論文・年次報告について略記している。正確な情報については該当誌参照。



写真4 歴博コロタイプ原寸撮影時のセット 4色に分けて撮影する



写真5 原本照合風景 色見本と見比べながら紙の地色、墨の濃淡などを確定していく



写真6 正倉院事務所の古文書観察システム 顕微鏡・透過光・赤外線による観察を行う

経常調査では、台帳写真として新たにブローニー判モノクロフィルムでの撮影が行われたことも注意される（正集～塵芥文書）。これ以前、昭和20～30年代に古文書全点のマイクロフィルムが撮影され、希望に応じてデュープや紙焼きが頒布されていたが、その精度は今日的観点から言えば心許ない。この新たな写真の蓄積は、各種の図録や後述する八木書店刊の影印集成によって広く一般に供されることとなった。

(2) 歴博コロタイプと事前・事後調査

経常調査の一方で、国立歴史民俗博物館による古文書複製が始まった。これは正倉院にとっては外部からの全く新規の要望であったが、歴博の中心的事業の1つとして精緻な複製をつくる点で意義深く、協力することとなった。昭和56年（1981）秋から大型カメラによる原寸撮影が行われ、のちデジタルカメラに移行して、平成26年現在、撮影は続々修第十帙に突入、完成品は累計358点（354巻と4冊）にのぼっている。これほど高度な複製品を展示用資料として、また研究用資料として利用できる環境をつくり出したことは、歴博の大きな功績である。

正倉院側としては、事前の調査が肝要である。経常調査とは異なり、撮り漏らしのないように、また安全に扱えるように撮影シートを作成するのである。毎年秋に宝庫が開封されると、原本を手にとって紙数を確定し、不安定な箇所や取り扱い上の注意点、朱の具合などを確認し、紙の重なりや墨が隠れている箇所をリストアップする。重なりの部分は透過光撮影し、隠れた墨をやや強調して刷るからである。その意味でコロタイプには各処に作為が入るが、それゆえに原本よりもよく見える場合がある。そうした事前準備を経て、撮影の現場では注意点を歴博の担当者と確認しながら、古文書のハンドリングに集中することになる。さらに撮影後には、原本との照合や色校正が入念に行われる。紙や墨・朱の色の具合、相互の異同が照合・色校正の主たる関心事であり、作業を通じて気づかされる事柄も少なくない。⁽⁶⁾

コロタイプ複製の意義については、本号の仁藤敦史氏の文章を参照していただきたいが、正倉院の古文書調査の全体との関わりで言えば、特別調査の報告におけるビジュアル的要素、そして経常調査で重視している各種の痕跡や紙質といった「原本だからこそその情報」にあたるものが、複製というかたちに集中的に表現されていると言えよう。原本を複製することは、ぱっと見を似せるのではなく、原本の持つ豊富な情報を丹念にすくいとることに他ならない。歴博の事業は、正倉院の特別調査や経常調査とは別ではあるが、それに類する調査の産物なのである。

(3) X線分析の開始

昭和57・58年（1982・1983）、正倉院に新たにX線回折と蛍光X線分析の機器が導入された。以来、正倉院宝物の保存と調査に役立てられている。X線回折法は結晶質化合物の種類を、蛍光X線分析法は元素の種類や量を明らかにするための方法で、いずれも顔料の非破壊調査に大変有効である。これまでに正倉院宝物の彩色に確認された無機顔料は約20種類⁽⁷⁾にのぼる。

古文書に関して言えば、いわゆる「朱印」「朱筆」の同定に威力を発揮している。一般的に、朱は鮮やかな発色、ベンガラは暗褐色、鉛丹はその中間に位置する様々な発色を呈する傾向があるが、実際には褪色の具合もあり、肉眼での識別はかなり困難である。それが分析により明確になり、用

途や時代による使い分けがおおよそ分かってきた。例えば、東大寺献物帳に捺された天皇御璽印は鉛丹と朱の混合物で、鉛丹を主体としており、延喜式が朱とするのとは異なる。東南院古文書の太政官印は9世紀初頭までは鉛丹に若干のベンガラを混ぜたものであるが、時代が下るとベンガラを用いる。国印はいずれもベンガラを用いている、⁽⁸⁾などである。こうした科学的分析が経常調査に加わることとなった。

(4) 赤外線カメラシステムの導入

昭和63年(1988)には赤外線カメラシステムが導入された。古文書の調査は肉眼観察が基本であり、ルーペや顕微鏡での部分観察や、紙の重なり部分では透過光で墨を透かし見ることになる。それでも判読できない場合は赤外線カメラが効果的である。

システムの導入時期は、ちょうど経常調査の対象が塵芥文書に入ったところである。通常古文書の接続を問う場合、左右の形状観察が主となるが、破損の進んだ塵芥文書では上下左右全方向の接続先を探すことになる。塵芥固有のアプローチが必要となるわけで、各片の形状のほか、わずかな墨移り・墨の染み込みが重要な復元根拠となる。赤外線はこれらの痕跡の確認に威力を発揮している。⁽⁹⁾

(5) 影印集成の刊行

昭和63年(1988)からは正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』(八木書店刊)の刊行が開始され、現在も進行中である(表2)。この企画は経常調査の蓄積を前提とするもので、前述のプロローグ判を用いたモノクロ写真図版を本体とする(後集以降は改めて撮影している)。また、巻末には書誌情報や界線(薄墨やへら押し、折りによる)、文字の抹消や重ね書き、紙の表裏など、写真では分かりづらい情報を「解説」として盛り込んでいる点が特徴である。

この「解説」は、接続を復元する史料編纂所の『正倉院文書目録』や、原本観察のトピックスをまとめる正倉院事務所の年次報告とは、内容も文体も異なる。また、原本そのものを模した歴博のコロタイプとも当然異なる。言わば情報発信の「棲み分け」である。こうした「棲み分け」は、情報の受け手の側からすれば、参照すべき成果が分散しており、不便な側面もあるかもしれない。しかし、原本の情報を1つの媒体で一様に表現するのはかなり困難であり、こうした「棲み分け」の複合によって情報を発信していく方がより原本の姿を伝えられると思う。書肆の理解と協力を得て正倉院事務所として紀要の年次報告だけでなく、影印集成によって写真図版や書誌情報を網羅的に提示できる手段が得られていること、そして史料編纂所や歴博といった他機関と複合的に情報を発信できていることは、実に有り難いことである。

なお、塵芥文書の冊からはX線分析の成果も盛り込まれ、同裏の冊には赤外線透過光写真の挿図も使用されている。

4 近年の調査と関係書籍の刊行

(1) 各種図書の刊行

昭和50年代からの経常調査とその進展を受けるかたちで、ここ20年ほどは正倉院事務所編や職員執筆による図書の刊行が目立つ(表3)。特にビジュアルな図書が多い。

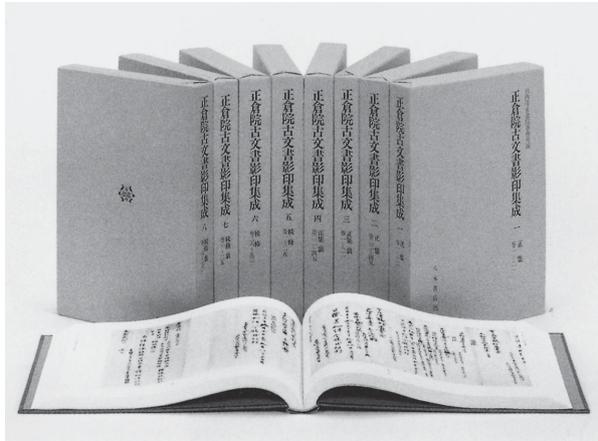


写真7 『正倉院古文書影印集成』正集・続修（八木書店刊）

表3 特別調査①～③／関係書籍の刊行

刊行年	執筆・編集	タイトル	所収等	出版社	備考
明治 41 (1908)	宮内省宝器主管	『正倉院御物目録』		(←宮内省御物整理掛)	
明治 41 (1908)	宮内省宝器主管	『正倉院古文書目録』 正集／続修／後集／別集／塵芥／続々修 3冊／東南院 計 9冊			
大正 10 (1921)	橋本進吉解説	『南京遺文』	『南都秘極』	佐佐木信綱	
昭和 2 (1927)	橋本進吉解説	『南京遺芳』		佐佐木信綱	
昭和 4 (1929)	奈良帝室博正倉院掛	『正倉院古文書目録』 上(正集～続修別集), 中(続々修／塵芥), 下(東南院) 計 3冊			
戦後 特別調査の開始 (表1 特別調査一覧 参照)					
昭和 34～35	戸籍計帳研究会	正倉院戸籍調査概報	『史学雑誌』68-3, 69-2・3		昭和 33～35年 科研「戸籍計帳」
①昭和 39 (1964)	正倉院事務所編	『正倉院の書蹟』	宮内庁蔵版	日本経済新聞社	昭和 31～34年 特別調査「書蹟」
昭和 44 (1969)	関根真隆	『奈良朝食生活の研究』		吉川弘文館	
②昭和 45 (1970)	正倉院事務所編	『正倉院の紙』	宮内庁蔵版	日本経済新聞社	昭和 35～37年 特別調査「紙」
昭和 49 (1974)	関根真隆	『奈良朝服飾の研究』		吉川弘文館	
昭和 50 (1975)	松島順正編	『正倉院の書跡』	『日本の美術』105	至文堂	
昭和 53 (1978)	松嶋順正編	『正倉院宝物銘文集成』		吉川弘文館	
昭和 56 (1981)	松島順正編	『飛鳥・奈良時代の書』	『日本の美術』179	至文堂	
昭和 50年度 古文書経常調査の開始 (表2 古文書の経常調査 参照)					
昭和 51 (1976)	正倉院事務所編	『正倉院の金工』	宮内庁蔵版	日本経済新聞社	昭和 45～47年 「金工(第2次)」
昭和 62 (1987)	杉本一樹解説補注	『南京遺文・南京遺芳』		八木書店	復刊
平成 2 (1990)	杉本一樹	鳥毛立女屏風本紙裏面の調査	『正倉院年報』12	正倉院事務所	昭和 60～63年 屏風修理
平成 6～9	正倉院事務所編	『正倉院宝物』		毎日新聞社	10冊本
平成 11 (1999)	杉本一樹責任編集	『正倉院 文書と経巻』	皇室の名宝 05	朝日新聞社	週刊朝日百科
平成 13 (2001)	杉本一樹	『日本古代文書の研究』		吉川弘文館	
平成 15 (2003)	杉本一樹	『正倉院の古文書』	『日本の美術』440	至文堂	
平成 21 (2009)	飯田剛彦	『正倉院の地図』	『日本の美術』521	ぎょうせい	
③平成 22 (2010)	正倉院事務所編	特別調査 紙(第2次) 調査報告	『正倉院紀要』32	正倉院事務所	平成 17～20年 「紙(第2次)」

宝物全般については毎日新聞社刊の10冊本の大型図録が基本である。同図録は北倉の書巻についても詳しく、北倉Ⅲの冊には献物帳や雑集などのカラー図版が原寸ですべて載り、曝涼帳や出納関係の帳簿もモノクロで載っている。巻末には詳しい書誌情報を収める。また各冊末尾には宝物の銘文が集成され、松嶋順正『正倉院宝物銘文集成』以後の知見がまとめられている。今後、宝物の銘文を確認するにはまず同書を参照していただきたい。ただし、近年調査した分については『正倉院紀要』に釈文を載せ、修正を施しているところや新出のものも少なくない。

古文書関係では以下のものが挙げられる。いずれも専門的研究を基礎としつつ、ビジュアルを充実させたかたちでの成果の公表である。

- ・『南京遺文・南京遺芳』の復刊〔八木書店、1987年〕

正倉院古文書の個別解説に詳細な補注が加えられた（杉本一樹氏執筆）。

- ・『正倉院 文書と経巻』〔週刊朝日百科「皇室の名宝」、1999年〕

古文書の全体像を、多くのカラー図版とともに提示する（杉本一樹氏責任編集）。

- ・杉本一樹『正倉院の古文書』〔「日本の美術」440、2003年〕

古文書の全体像をより詳しく多様な観点から示す。写経機構の変遷と文書群の形成にも触れる。

- ・飯田剛彦『正倉院の地図』〔「日本の美術」521、2009年〕

荘園図の全体像と、荘園図作成の経緯を関連文書とともに網羅的に解説する。

ちなみに、「日本の美術」では正倉院宝物関係が何度か出されており、近年では宝物の素材、綾、装飾技法、舞楽装束、宝飾鏡、武器・武具・馬具をテーマとして、職員によって執筆されている。ほかにビジュアルではないが、関根真隆氏により古文書の物名索引が刊行された。内容ごとに配列し、また対応する宝物についての要を得た解説を付すなど、他にはない便利さがある。

(2) 経常調査の進展—古文書以外へ

正倉院には古文書以外にも実にさまざまな墨書、銘文資料がある。昭和60～63年（1985～1988）に行われた鳥毛立女屏風の修理に伴う本紙裏面の調査では、下貼文書だけでなく屏風本体に反故紙が用いられていることが判明し、その墨書の内容から屏風の年代や製作地に関する重要な知見をもたらし⁽¹⁰⁾た。

近年の経常調査では、古文書はもちろんであるが、ほかに伝世木簡や東大寺開田地図、薬袋などが対象となり、後二者では文書担当と染織担当との分野横断的な調査が進められている。また、紙素材そのものに対する調査も進んでいる。古文書の経常調査の報告は平成10年代以降、途切れがちであり（表2）、担当者として忸怩たる思いがあるが、これは調査対象が続々修に入って時間を要すること、古文書以外を対象とする経常調査が増えたこととも無関係でない。遅れはいずれ取り戻さなければならないが、文書担当の経常調査が古文書以外にも手を広げ、ある程度時間をかけることは今後も続くと思われるし、また必要なことであると思う。言うまでもなく古文書はそれ自体で完結しているのではない。文字資料としての内容はもちろん、文字や紙の使われ方として、常に正倉院に残る文字資料全体のなかで捉え直すことが必要だろう。正倉院宝物全体、ひいては出土文物を含めた奈良・平安時代のなかの、一部としてそこにあることを改めて自覚したい。こうした視点による調査の成果は古文書の調査自体に立ち返ってくるはずである。

(3) 特別調査

経常調査が進展してきた一方で、近年新たに古文書を対象とする特別調査が企画・実施された。「紙（第2次）」である。第1次の調査からおよそ40年、関連する研究の蓄積や分析機器の発達を踏まえて、再び紙の総合調査が計画されたのである。調査員の大川昭典氏によって、微量の繊維片を用いたC染色液による繊維種判定が行われたことも特筆される。報告に際しては、カラー図版が容易になったこともあり、多くの挿図が用いられた。

③ 特別調査「紙（第2次）」

調査員：湯山賢一・増田勝彦・大川昭典・赤尾栄慶

目的：研究の蓄積，機器の発達を踏まえた紙の総合調査

期間：平成17～20年（2005～2008），平成21年（2009）補足

報告書：『正倉院紀要』第32号，2010年

図版：カラー挿図183点 透過光写真を多用，一部に繊維の拡大写真を用いる。

論考：紙（第2次）調査報告 まえがき（杉本一樹） 調査の狙いと成果をまとめる。

紙（第2次）調査報告 調査所見／一覧表から成り，分析を盛り込んだ報告本編。

古代料紙論ノート（湯山賢一） 紙料作製の工程をもとに延喜式の解釈を示す。

正倉院文書料紙調査所見と現行の紙漉き技術との比較（増田勝彦）

繊維の配向や上桁の有無から，揺動法として捉える。

聖語蔵経巻管見（赤尾栄慶） 規格や字姿を検討，隋唐経が楮を含む重大さを説く。

成果：丁寧な下処理や打紙加工，再生紙，ネリや填料の存在を多く確認。一方で楮や雁皮以外の紙質（三桎・マユミ・苦参など）もみられ，早くから高い技術と多様性が共存していたことが明らかになった。

(4) 東南院古文書の撮影ほか

平成20～23年（2008～2011），学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生」（代表：東京大学 田島公教授）の一環として，正倉院において東南院古文書の高精細写真の撮影が行われた。これも外部からの要望によるものであるが，学術創成は国家プロジェクトと言ってよい規模で，またデジタル撮影による学術資源化が進められること，その保存と公開に東京大学史料編纂所があたることから，正倉院としても協力することになったのである。古文書の撮影としては初めて，全編デジタルカメラによるカラー撮影が行われた。現在はすべて撮り終えて整理が済み，史料編纂所内で公開が開始されている。従来マイクロフィルムでしか確認できなかった内容が高精細のカラー画像として閲覧できるわけで，研究の進展が期待される。

なお，史料編纂所ではほかにも，正集のモノクロ紙焼き写真から文字を切り出し，「電子くずし字典データベース」で検索できるようにするなど，新たな試みも行っている。

このようにフィルムからデジタルへの移行，活用方法の多様化など，写真を取り巻く環境は近年大きく変化しており，利用者にとっては分かりにくい部分も多いと思われる。簡単に写真の有無をまとめたものを掲げておく（表4）。

文 書

大宝2 (702)

正集第22巻第1・2紙 御野国味蜂間郡春部里戸籍 (大宝2) (ID52)

赤みを帯びた紙で、表面は平滑でツヤも顕著である。罫目が細かく、糸目幅も狭い。朝鮮紙に似た印象との所見もあった。打紙は入念に行われており、墨のにじみもみられない。繊維種は楮と判定された。繊維はよく切れ、ほぼ5mm程度の短い繊維束が多数散在する。

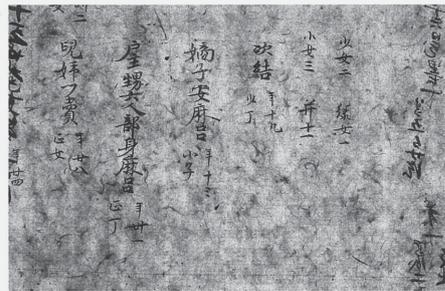
繊維分析の結果、楮を主原料とするが、雁皮も少量混入されていることが判明した (雁皮の配合率は5%以下)。



挿図29 正集22第2紙 繊維 (×50)



挿図30 正集22第1紙 (透過光)

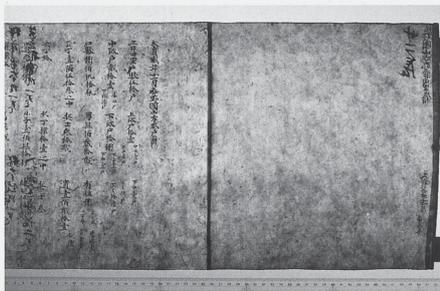


挿図31 正集22第1紙 部分 (透過光)

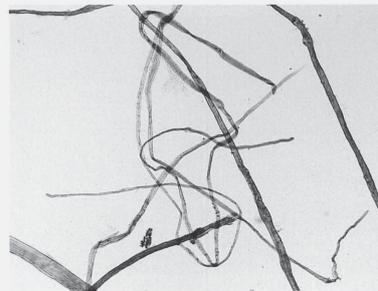
正集第25巻第1・2紙 御野国山方郡三井田里戸籍 (大宝2) (ID53)

赤みのある紙で、第1紙は戸籍の原標紙、第2紙からは本紙である。共に紙質としては類似するが、打紙加工の有無 (標紙はやや厚手の非打紙、本紙は打紙)、繊維束の混入度合い (本紙は混入率が高い) 等の点で異なる。漉きムラやニナイが多く、緊密度も低い。10mm程度に切断されたヤケの繊維束が多く含まれる。品質の劣る原料を使用したのであろう。

繊維分析の結果、原料の大半は楮で、僅かに雁皮の混入が認められた。



挿図32 正集25第1・2紙 (透過光)



挿図33 正集25第2紙 繊維 (C染色) (×50)

写真8 紙(第2次)調査報告の誌面

『正倉院紀要』第32号, 2010年 (正倉院ホームページにて閲覧可能)

表4 正倉院古文書の写真とその利用

	主体	目的	種別	媒体	正集	続修	後集	別集	塵芥	続々	東南	備考
1	宮内庁	撮影	モノクロ	フィルム	○	○	○	○	○	○	○	マイクロフィルム
2	正倉院事務所	撮影	モノクロ	フィルム	○	○	○	○	○			ブローニー判 台帳写真
3	正倉院事務所	撮影	カラー	フィルム/デジタル	△	△	△	△	△	△	△	必要に応じて(図録など)
4	正倉院事務所 (八木書店)	撮影・出版	カラー	フィルム			○	○	○			影印集成
5	史料編纂所	撮影・出版	モノクロ	乾板/フィルム	△	△	△	△	△	△	△	大日本古文書
6	史料編纂所	撮影・出版	カラー	フィルム							△	荘園絵図聚影(絵図)
7	史料編纂所	DB	モノクロ	(紙→)デジタル	○							2の紙焼きをデジタル化, 文字切り出し(字典DB)
8	史料編纂所 (学術創成)	撮影・DB	カラー	デジタル							○	史料編纂所内で公開
9	歴博	撮影	モノクロ	フィルム	○	○	○	○	○	△		コロタイプ素材
10	歴博	展示	カラー	(紙→)フィルム→ デジタル	○	○	△	△	△	△		コロタイプを撮影, フィルムをデジタル化
11	歴博	撮影	カラー	デジタル							△	コロタイプ素材(続々修7-2~)
12	小口雅史	出版	モノクロ	(紙→)デジタル							△	1の紙焼きをデジタル化
13	SOMODA	DB	モノクロ	(紙→)デジタル	○	○	○	○	○	○		1の紙焼きをデジタル化
14	市川市史	掲載	モノクロ	フィルム	△						△	9の透過光紙焼きを転載
15	機関/個人	研究資料	モノクロ	フィルム(dupe)/ 紙焼き/転載	○	○	○	○	○	○	○	

〈その他〉

- 北倉の書巻類、献物帳、曝涼・出納帳簿は、毎日本北倉Ⅲ所収のものが良い。
- 中倉32詩序は、平成7年正倉院展図録に全紙のカラーあり。
- 中倉59華嚴経論映に使われている新羅国官文書は、戦前の修理時の写真のみで、カラー無し。『正倉院の書蹟』に原寸一部あり。全姿は毎日本中倉Ⅱ(ただし小)、平成3・14年正倉院展図録にあり。
- 南倉47佐波理加盤付属文書は、『正倉院の金工』が原寸で良い。ほかに全姿は毎日本南倉Ⅰ(ただし小)、平成14年正倉院展図録にあり。

5 おわりに—今後の古文書調査

以上、正倉院事務所における古文書調査のあゆみを振り返ってきた。今後の調査の見通しとしては、引き続き外部の調査や撮影(史料編纂所・歴博)へのサポートを遺漏なく進める一方、経常調査を進める、ということに尽きる。調査や撮影はいずれも長期の計画であり、完結には少なくない時間を要する。また、調査環境や情報発信を取り巻く環境は大きく変化しているが、各機関とうまく連携しながら、今後とも研究と公開を進めていければと思う。

正倉院自身の経常調査は現在やや足踏み状態であるが、影印集成で計画されている塵芥文書の復元編の刊行を経て、再び続々修を進めていくことになる。その成果は今後年次報告や影印集成の「解説」などのかたちで公表されるだろう。また、古文書に限らず、修理や整理に絡んで職員が調査している宝物について、墨書等が残るものは宝物それ自体の構造や技法と絡めながら検討していくことになる。もとより物理的な限界はあるが、古文書を中心にしつつ、なるべく手を広げて資料を見て、公表していきたいというのが本音である。

なお、調査や写真の公表という点では、正倉院事務所編・発行の紀要のほか、インターネット上での公開というかたちも進むと思われる。すでに紀要の既刊分については、正倉院ホームページ(<http://shosoin.kunaicho.go.jp>)においてPDF形式で閲覧可能である。また一部ではあるが、古文

書のカラー写真も公開している（献物帳5種、雑集・杜家立成・楽毅論は全紙、正集はカラーフィルムがあるものはほぼ全て掲載）。こうしたツールを活用しながら、今後より情報を共有できる環境を作っていきたい。

註

- (1)——石上英一・加藤友康・山口英男編『古代文書論』156頁。
(東京大学出版会, 1999年)所収。のち、杉本一樹『日本古代文書の研究』(吉川弘文館, 2001年)に収録。
- (2)——皆川完一「史料編纂所の正倉院古文書調査」『正倉院文書研究』第5号, 1997年。のち、同氏『正倉院文書と古代中世史料の研究』(吉川弘文館, 2012年)に収録。
- (3)——『史学雑誌』第68編第3号, 第69編第2・3号, 1959・1960年。
- (4)——岸俊男「所謂『陸奥国戸籍』残簡調査概報」『書陵部紀要』第10号, 1958年。のち、同氏註(5)著書に収録。
- (5)——岸俊男『日本古代籍帳の研究』(塙書房, 1973年)
- (6)——虎尾俊哉「正倉院文書複製事業とその思い出」『正倉院文書研究』第5号, 1997年。
- (7)——成瀬正和「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要』第26号, 2004年。
- (8)——成瀬正和「正倉院文書と顔料調査」宍倉佐敏編著『必携 古典籍・古文書料紙事典』八木書店, 2011年。
- (9)——飯田剛彦「正倉院文書の原本調査」『第58回正倉院展目録』奈良国立博物館, 2006年。
- (10)——杉本一樹「鳥毛立女屏風本紙裏面の調査」『正倉院年報』第12号, 1990年。のち、同氏註(1)著書に収録。

(宮内庁正倉院事務所保存課整理室, 人間文化研究機構連携研究員)

(2014年1月7日受付, 2014年5月26日審査終了)